慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田哲学を語る
Sub Title	On Mita Philosophy Society
Author	松本, 正夫(Matsumoto, Masao) 沢田, 允茂(Sawada, Nobushige) 大江, 晁(Ohe, Akira) 中山, 浩二郎(Nakayama, Kojiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.7- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I 座談会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0007

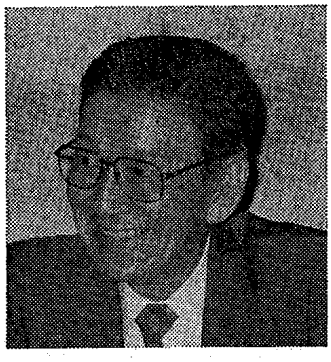
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

座　談　会

「三田哲学を語る」

出席者　名誉教授　松本正夫　先生
同　沢田允茂　先生
同　大江　晃　先生
同　中山浩二郎　先生
日　時　平成2年5月30日
場　所　三田新研究室会議室



中山（司会）　それでは進行係ということで進めさせていただきます.

初めに，この企画を立てられた時，会長でいらっしゃった大江さんから，今日の集まりの趣旨といったものを簡単にお話し願います.

大江　実は今年が文学部だけではないのですが，経済学部，法学部等の学部が始まってからちょうど百年になるんですね.

それで，いろいろな学会で何らかの形で記念になることをしようではないかという話しが現在進行中でして，その一つとして三田哲学会でも，学会誌の記念号のようなものを出したいということがあって，その中に，できれば三田哲学会の過去というか古いところから現在に至るまでを，この百年ということでもって少し回顧し且つ未来への展望というか，そういう

ふうなことも考えてみたい.

それで，三田哲学会の皆さんのご意見で，主として今日お集まりの松本先生，沢田先生に三田哲学会の過去の成り立ちというか，いろいろなことを伺おうということがひとつ企画されました.

先生方も，率直に申し上げてお歳ですから憶えていらっしゃることを今のうちに伺っておこう．われわれも忘れてしまうことが沢山あるのでできるだけ今のうちに吐き出しておこう，ということでこの会が持たれたわけです.

そういうことで，思い出話を伺わせて頂きたいということでございます.

中山　幸いに，三田哲学会の「哲学」発刊の経緯とかそのようなことについては橋本先生の「回顧 70 年」(「哲学」第 46 集) という先生ご自身の記録が事務局の手でコピーされお手許に差し上げてございますが，それとは別に，松本先生が三田哲学会ないしは「哲学」という機関誌との出会いというか，いつごろからそういうものに出会われたか，その辺からお話し頂ければ有り難いと思いますが.

＊無給時代の日日＊

松本　僕は昭和８年に文学部を卒業したわけです．卒業したのはいいけれど，もうだらしのない学生でして，自分では卒業したつもりでいたんですが実は必修科目を取ってないことが後でわかってね．それで４月には卒業できず追試験を受けたりしてね，(笑) ５月卒業というふうなだらしのない…….

大江　５月卒業ですか.

松本　５月卒業か６月卒業か……．しかも助手になることがだいたい予定されていたのが，そんなだらしのない学生だというわけで有給助手には

なれず，無給助手でやっとのこと許してもらってね．まあ，そういうわけで私を大いに弁護してくださった船田教授には初めから大変ご迷惑をかけてしまいました．

そういう厄介な人間でしたが，三田哲学会の事務や，「哲学」の編集などは橋本先生の監督の下で，初めは失敗ばかりしていましたけれどもだんだん慣れましてね．ただ無給助手でしたからね…….

それから私が有給になったのがずうっと後のことでした．助教授になったちょっと前ぐらいでしたね．

助教授になったのが昭和 19 年かな．ですから長いですね．もう，戦争が終る間際．(笑)

中山　11 年間無給ですか．

松本　そのくらいだったんだ．とにかくその間，三田哲学の編集の事務とか，そういうことをみんなやってきました．

戦争中，結局私は，思想が悪いということで，そういうふうな扱いを受けてきたわけです．

大江　とにかく無給でやっていらっしゃったんですか．

松本　それで私お願いしたんです．「すでに妻あり子あり，何とかしてください」と．

川合先生のところに行ってお願いしたら，川合先生はアハハハと笑ってね，「あ，そんなことはもう教授会で通ってたんだよ」なんて言ってね，有給にしてくれたんです．

中山　放っておかれたわけですね．

松本　そうそう．そんな具合で有給にしていただいた．昭和8年に卒業してずーっと，12 年近く助手生活してました．

というのは，私の思想がはなはだ非常時にはそぐわない思想だということに認定されてたもんで…….

今から考えてみますと，まあ名誉だと思っております．

大江　では，その間先生は三田哲学会の事務をなさってたんですか.

松本　事務をやっていました.

大江　その頃，そういうことをやってらっしゃったのはお1人だったんですか.

松本　三田哲学会の事務は私一人でやってました.

大江　当時，雑誌とか例会とかは…….

松本　雑誌の編集は橋本先生の監督の下にやっていました．例会というのはあって，そういうことの事務も……．交詢社とか，そういう一流のところでやって，時々事務的なことでトチッては橋本先生に叱られたり笑われたり，というわけでしたね.

大江　そうすると例会の，たとえばスピーカーを選ぶとか．通知を出すとか…….

松本　スピーカーを選ぶようなことは橋本先生の命令に従ってやってました.

大江　そうすると通知を出して，場所をどこかに…….

松本　場所を決めるとかそういうこともみんな橋本先生に決めていただいてね．こっちはそういう才覚はないんだから.

大江　下働きですね.

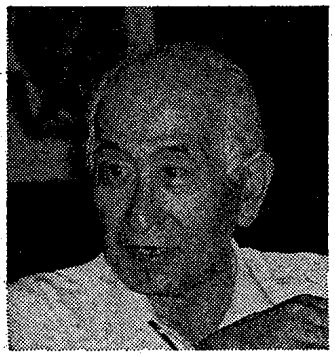
松本　まあ，そうですね.

＊手痛い失敗＊

中山　そこで沢田先生にお伺いしたいんですが，昭和 15 年2月 17 日に赤坂の幸楽で卒業諸君の論文発表というのがあって，そこに先生のお名前が『哲学』誌上に初めて出てくるのですが，ご卒業は昭和 15 年ですか.

沢田　昭和 15 年です.

中山　「非合理的主体の展開」，そういう題目だったですね.



沢田　卒論の準備に「実存主義の底流」みたいなものを書いてたので，それを……．

中山　先生の，三田哲学会ないし機関誌「哲学」との出会いをここでちょっとお話しいただけますか．

沢田　機関誌との出会いというか，三田哲学会との出会いというか，会と出会うということはないんで，会の中の1人の人間と出会ったことは，日吉の予科の2年くらいでしたか．その時に，三田哲学会はそれまで三田だけだったわけですね．

ところが日吉に初めてできたので，そこで支部のような形で，名前は正確に憶えてないが「日吉哲学会」というようなものを作って，そこに講師として松本正夫という助手の人が来て，当時岩波書店から出版された『フォールレンデル　西洋哲学史』を放課後日吉の小さな部屋に集まって講読してもらったのです．ギリシアから始めてずーっと．

それは僕にとって非常に面白かったんですね．もちろんその前に僕は哲学へいこうと思っていたけれども，その松本さんの講義を聞いて本当に道が開けたというか，それが三田哲学会との出会いの最初だと思います．

それを通じて，今度は三田哲学会ではなく，学校の帰りに，田園調布の新婚ホヤホヤのお宅に伺って，しょっちゅう晩御飯をご馳走になったり，いろいろな形で……．そしてそこで僕は，よく言うんだけれども，横綱の胸を借りてぶつかり稽古をしていたわけなんだ．

そしてその当時，卒業論文を書いた卒業生は全部三田哲学会主催の送別会か何かで，自分の書いた卒業論文の内容をそれぞれ発表するという制度があって，そこでさっき中山さんが指摘されたように，僕は卒論を発表し

たんです.

一応その時には高等部（戦前あった専門学校）の助手に残ったわけですが，松本さんはそのとき学部の助手だったわけですね．それで一緒に三田哲学会の仕事をしなさいと言われて，一緒にやったんです.

それで一緒にいろいろやっていて，2 人でしょっちゅう失敗をしてました．松本さんだけじゃなく僕もずいぶん失敗しました．事務的な日にちを間違えたり.

第一ホテルでやるのに，第一ホテルに日にちをちゃんと電話で確認したつもりで，そのとおり日時を入れて皆に通知の葉書を出したところが，当日になってホテルの入口に案内板が立っていない.

それでホテルに，どうしたんだと言ったら「これは明日のはずです」．そのうちみんな先生方が集まってきて，それで僕は入口に立って，「どうも日にちを間違えました，すいません」と言って頭を下げていたんです．橋本先生が会長だったんですが，その時「君，そういうことは電話では駄目だよ，ちゃんと直接行って確かめてこなきゃ」と言ってクギを刺された.(笑)

中山　その第一ホテルで日取りを間違えたという話は，かねてから松本先生から伺ってましたけれども.

大江　あれは何時ごろの話ですか.

沢田　僕が助手で残ったのが 15 年の 4 月です．そして 15 年の暮には僕は軍隊に引っ張られたから，その間の出来事です.

松本　それでその時，沢田さんが僕に最初に「僕は貴方を先生と呼ばない，松本さんと呼ぶ」って宣言したわけ.

沢田　それはいつも固定観念で間違ってるんでね，本当は違うんですよ．それは，僕が軍隊から復員して帰ってきて，そして最初に「松本先生」と言ったら，「君，僕は君にクラスで教えたことはないんだから先生なんて呼ぶな」と言って，それで仕方なく僕は「松本さん」になったんです．そ

れが何時の間にか逆になっちゃった．よくあることですけどね．(笑)

中山　沢田さん，復員されたのは何年ですか．

沢田　21年の6月．

＊三田哲学の特徴＊

中山　お二人のお話を伺って，結局三田哲学会というものをやっていらっしゃいまして，その中で三田哲学会というのは，ほうぼうの大学にいろいろな哲学会があると思うんですけれども，こういうところがちょっと違うなとかそういう特徴といいましょうか，そんなものをお感じになったことはございませんでしょうか．

沢田　その当時，哲学会として雑誌を出していたのは，京大の「哲学研究」と東大の「哲学雑誌」でした．そういうものを比べてみると，向こうは確か毎月刊だったと思うんですね．これは岩波とかの雑誌社が片一方にはついてたと思うんです．そういう形で月刊でしょっちゅう出してた．こちらは年に1回か2回くらいでしたね．

しかも，純粋の哲学だけでなくて社会学やいろいろ，美学ももちろん入っているし西脇順三郎さんも書いているしというふうにわりに幅広かった．他の哲学雑誌は純粋に哲学専門のプロパーの人たちが書いていたのに対し，そんな違いがあったと感じています．

中山　今ご指摘がございました，いろいろな科の方が入ってらっしゃる．私が哲学会に入った時も，哲学科哲学専攻であって，その他に倫理，美学，それから社会学，心理学，教育学という6専攻があったように思うんですが，それがまとまって三田哲学会をつくり，そして『哲学』という雑誌を出してきた．この歴史的な経緯というのはどういうことだったのでしょうか．

沢田　僕，考えてみるとまだ各学科，要するに哲学科，史学科，文学科と分かれて，その中に細かく，哲学の中に美学だとか心理学だとかいうふ

うに分けてやるほどの経済的余裕はまだなかったんだろう．だから1学部に，哲学科だったら哲学．そうするとそこに哲学専攻だけでなく美学も心理学も全部入る．おそらくそういう財政的な問題があったのではないかと思う．

中山　ちょうど財政的という話が出まして，先ほど大江さんがおっしゃったように今年百年ということで文学部では『三田文学』のほうを中心に考えているようなんです，委員会ができまして．

ところが，『三田文学』は『哲学』が創刊されたことによってつぶされたというふうな思い込みがあるんですね．実は水上瀧太郎さんが“『三田文学』の復活”と題して，一度『三田文学』が廃刊されて，それが復刊されたその時に，『哲学』ができて，そのために塾当局がそちらへお金を出すので『三田文学』はつぶれた，と書かれてるのだそうです．

それに対して橋本先生が「回顧 70 年」の中で，そういう誤解があるけれどもそれはとんでもない間違いだ，とはっきりいわれてるんですね．その辺のことは，何か御存じではございませんでしょうか．

松本　僕は全然知らない．

沢田　僕も知らないけれども，それはちょっとおかしいと思うんですね．というのは，『三田文学』というのは市販してて，むしろそちらでどんどん売ってたわけでしょう．

だから学校からの補助金だけでやっているはずはないと思うんですよ．

中山　でも，その頃の『三田文学』というのは，主幹というのを塾当局が決めてたらしいんですね．それが永井荷風だったらしい．

その永井荷風が病気がちなために沢木四万吉という方がお代わりになって編集主幹になられた．

松本　沢木先生は美学の先生だ．

中山　美学の先生だったためでしょうか．文学や小説だけじゃなくて，もっと，少し硬いものも入れたらいいんじゃないか，という新しい編集方

針を出された.

そういうことで今度は逆に，文学作品が集まらなくなるという意外な結果になっちゃった．そこで廃刊せざるを得なかったというふうな，これが最初のいきさつらしいんですね.

沢田　それではだいぶ前の話ですね．僕たちが知っている『三田文学』はもう一般に市販してどんどん出てたから．しかも毎月出てたんですよね．だから，ちょっと違った経営方法をしているなと思ってた.

僕たちが予科へ入った時に『三田文学』で，石坂洋二郎の「若い人」が次々と毎号発表されて，日吉の学生からみんな評判になってたですから.

＊三田哲学会の活動＊

大江　先生方が関係されてた頃の三田哲学会というのは，活動はわりとコンスタントにされてたんですか.

松本　例会というものはちゃんとやった.

大江　例会はだいたいどれくらいのペースでしたか.

沢田　例会というのは，確か毎学期に1回くらいでしたね.

中山　今例会のお話が出ましたけれども，こんどは『哲学』という雑誌ですね．これも大正 15 年に刊行されまして，その時に第1集が出てるわけです.

それで松本先生が論文を出していらっしゃるのが第 13 集になるわけですね．そうすると8年目ですから，そのときに 13 集が出てるというと，年に2回くらい出していたんでしょうね．そうなんでしょうか.

沢田　2 回の時もあったし1回の時もあった．それから後もそうじゃなかったですか.

大江　そうですね．でも，一応2回を目標にはしているけれども，時々1 回のことがあったりなんかしましたね.

当時，たとえば雑誌を出すのに財政的にどうとかいうふうな問題は起き

なかったんですか．あれ，塾当局がかなりお金を出してくれたんですか．

松本　補助金を予算に計上してたと思う．補助金というけれども，まあ全額だね．

沢田　学生から学生会費取ったんじゃない，そうじゃなかったんですか．

松本　僕もそれ，よく知らない．

大江　特にそういう問題で悩んだとか苦労するとか，そういうことはなかったわけですね．

沢田　そういうことはなかった．

松本　お仕着せだった．第一，売れるもんじゃないからね．全額…….

大江　逆に，原稿集めるのに苦労されたというようなこともあまりなかった？

松本　それは，お願いしても，先生方のところへ行ってずいぶん頼んで，催促したことはあるけれども，新館先生なんか，やっぱり幾度も行ったな．

大江　やはり広い意味での哲学科のスタッフの先生たちが書かれる？

松本　専任者に書いていただくのが主ですね．

大江　たまには学外からということもあったんですか．

沢田　学外といっても，全然関係のない人じゃなくて，非常勤の…….

松本　みんな橋本先生がお決めになってたから，僕はそれに従って動いてた．

大江　だいたいいつごろまでそうだったんですか．

松本　戦争が終わるまで．

大江　そうすると沢田さんは，その間は兵隊にいってらした？

沢田　そうです．それで僕帰ってきて，助手だったもんだからもっぱら哲学会をやりなさいといわれて，それで名簿からいろいろな帳簿全部，松本さんのところから僕の阿佐ケ谷のうちに預かったわけですよ．

そして阿佐ケ谷を引っ越しする時に，僕だけでなく親父のほうと別れてこういうふうになっちゃったもんで，それでその時に中山さん，大江さん，

みんな荷物を…….

中山・大江　よく憶えています.

沢田　その時，確かに僕は持ってきたと思ったのがどっかに紛れ込んでそれがなくなっちゃった．そこから新しくするのがえらかったという，僕の失敗が一つあるんですよ.

中山　それでいろいろないきさつがあったのに，しかも今，共同研究室には『哲学』が大正 15 年の創刊号からきちっと保管できてるんですね.

これは大変なことだと思うんですけれども，それはやはり，最初の会長ないし橋本先生というすごいおっかない先生がいらして，それできちっとなすったんでしょうかね.

松本　そりゃそうですよ．橋本先生は，もうそういう点では厳しくなさる方だったから.

中山　私たち，大江さんが幹事長で私が幹事でずいぶん長年三田哲学の事務局をやりましたけれども，手紙の書き方から一つ一つ直されましたね．それから会があればそのたびに何かご馳走が出る．そのメニューまで御覧に入れてそれをお直しになる，そういう躾を受けたんですけどね.

松本　「それはダメだよ」って言ってね．(笑)

大江　メニューのチェック，それから飲み物ね．先生お酒飲まないから，キリンレモンかなんかじゃないとダメなんだ．あれには参ったな．(笑)

沢田　当時，東大と京大の2つの哲学会というのは，哲学科を卒業した人が沢山いてそういう人がしょっちゅう集まっていろいろなことをやってますわね.

慶應の場合，やはり哲学科卒業というのは数が少ないし，しかも哲学卒業したからって，ずーっと研究を続けている人というのは，もう学校に残っている人以外にはほとんどないから，そういう外部から集まってやるということはほとんどなかった．その点は非常に違うと思いますね.

だから中だけの，現職のそういう人だけで会っているからこじんまりと

はしてた．そういう点は，ちょっと違ってたね．

中山　それともう1つ，これは私の学生時代に感じたことなんですけど，たとえば心理学の横山松三郎先生，そういう方が出てらして，それで哲学の先生の発表に対して質問なさる，「素人なんだが……」と言いながら質問なさって，そういうことが慶應の哲学というものが育っていく上ですごく役に立ったんじゃないかなという印象を受けたんですが，そういうことはやはりあったんでしょうか．

松本　そういう点はいいな．領域が違う方がね．

沢田　やはり例会というのは，僕なんか助手であったり，学生の時にも出て，そこで相当刺激を受けたと思うんですよ．僕はいまだに，あれは卒業した時だったろうか，或は卒業した後だったのかはっきり憶えていないけれども，伊藤吉之助さんが実存哲学について講演された．

その時に，松本さんが立ち上がって，「そういう不安だとか憂鬱だとか，実存哲学，そんな言葉で哲学ができますか！」って食ってかかって，伊藤さんがカンカンになって怒って松本さんと両方やり合ってたことなど憶えてますよ．

そういうものを聞いて，なるほど，哲学の議論の中にはそういうことがあるのかと，やはりいまだに印象に残ってますよ．

＊西田幾太郎の想い出＊

大江　阪大にいった茅野良男氏が，西田幾太郎の年譜をつくるについて，慶應で話をしたことがあるそうだ，ということで再三尋ねられましてね．三田新聞か何かで多少記事が出てたんですけれども，それに関するご記憶はないですか．

松本　ない．

沢田　ないはずないと思いますよ．だってそれは，僕が 15 年に残った，その夏ですからね．その夏に西田さんが来た．

大江　『西田全集』の年譜には沢田さんの名前が出てくるのね．どこかまで送りにいったか迎えにいったか何かしたというのが．慶應の沢田とか何とかと2人名前書いてありますよ．

松本　特別講演で来てもらったわけだ．

沢田　夏の間ね．それでその時の世話は松本さんと僕がやらされて……．

松本　あれは小泉信三が，特別講演で西田さんに来てもらったわけ．

大江　連続で何回くらいやったんですか．

沢田　1週間に2回ぐらい．

松本　それで星岡茶寮で接待したよね．

沢田　最後はね．僕なんか出席を取らされましてね，文学部だけじゃなくてあの当時は西田さんが来るというので法学部だとか経済とかみんな来て，僕もそういう意味では，当時，英（ハナブサ）さんだとか，それからそういう法学の先生なんかもみんな……，それで顔覚えたんですよ．

そして西田さん，講演が終わると車で品川駅まで，僕一緒に乗っていってずーっと西田さんにいろいろ質問して．

松本　この方（沢田），横浜までくっついていった．

沢田　横浜じゃない，品川まで．お送りする車の中で西田さんと議論して，それで品川の階段降りて，僕は入場券買って横須賀線のホームまでいって，ホームでもまだ議論をして，そして電車が来てドアが開いて西田さんが乗っかって，でも座らないでドアのところに立ってこっち向いてまだ僕と議論してて，それでプシューッとドアが閉まって，そして行ったという，それなんか僕は非常に記憶に残ってます．

そしてそれの一番最後のところで，今松本さんが言われた星岡茶寮といって，芝公園の慈恵医大の前のこっち側のブロックのあの山の上に，その当時は，いわゆる政府のお役人とか軍人さんとかそういう人たちがよく使っていた料理屋があって……．

大江　（北大路）魯山人かなんかが開いたところでしょう．

沢田　そこで岩波茂雄なんかも一緒に呼んで最後の大宴会をやった.

松本　それで品川駅まで送った. 横浜まで行ったかと思ったが.

沢田　西田さんの御宅にはそういう関係で, 僕は松本さんと一緒に行ったことがあるんです.

大江　それは何回ぐらいやってどんな内容だったというようなことは, もうあまり憶えてらっしゃらない?

沢田　あれやったのが3週間かそのくらい. ぶっ続けじゃなくて, 1週間に2回ぐらい. それはちょうど西田さん, 最後あたりの著作を書いておられた頃だと思うんですが, 僕の記憶では西田さんの話, 繰り返し繰り返しで, きちっと発展して次々にというのではなくて, 何か自分でウロウロ歩きながら言っている, それを皆有り難がって聞いてたという形なので, 今考えてみると何を言ったのか. 結局何も残ってませんがね.

ただ, 非常に熱心でした. ただ本を読むのではなくて, 自分で考えて自分でこうやってという, その態度には非常に大きな影響を受けましたね.

中山　西田さんをお呼びになったのは, やはり松本先生がお知り合いだったんですか.

松本　いや, 小泉信三が呼んだんだよね, あれ, 僕はよく知ってたけどね. 鎌倉でね.

大江　三田哲学会というよりはむしろ慶應義塾が呼んだような感じなんですか.

沢田　資金としては小泉さんが手当されたと思う. ただ, その世話は, 結局われわれが務めた.

大江　他に, よそから来て三田哲で話をするというようなことはあったんですか.

松本　決まって話をした人というのは, ないよね.

沢田　まだ終戦前, 特に終戦直後はよそから来るという状況ではなかったので, ほとんどそういう人はいなかった.

大江　かなりの期間戦争だし，それから戦後だし…….

中山　そうすると沢田先生は，卒業論文はやはり実存哲学でなすったわけですか.

沢田　ええ.

中山　それで戦後帰ってらして，しばらくの間は…….

沢田　しばらくの間，要するにそれ以外に戦争中は仕入れが何にもないわけですから昔の在庫品で商売する以外なかったわけですよ.

中山　それでやっとわかりました．私は，学部へ入って，最初の年の終わりにちょうど大江さんが卒業なさる，その送別会みたいなものがあったんですけど，その時に沢田先生が私に向かって，私はその時お酒全然いただけませんでしたので，「一人で生っちょろい顔してやがるッ，哲学は病気だ!，飲め!」って一升瓶抱えて迫ってらしたんで，僕は一生懸命…….(笑)

それが間もなくアメリカへいらっして，帰ってらしたら，今度は馬蹄型のこういう記号を書いて「“コ”について」という講演をするから準備しろとおっしゃる．急に“健全な科学哲学”だというんで…….

沢田　途端に哲学が健康になっちゃった.

中山　哲学者というのは一体どうなってるのかというふうに思ったんですが.

沢田　やっぱりこれは日本全体のあれだと思うけども，やはり僕たちみたいに戦争体験のある者たちは，何かそういう異常な中で，病気の中で育ったようなものだし，ハイデガーだってそうですよね，あの2つの大戦の間で．だからそういう状況の中ではやっぱり，みんなが精神的に病んでた時代だからどうしてもそういう，病んでるなかでどうするかというようなことしかわれわれは考えられなかった，そういうふうになるのも無理はなかったと，自分で自己弁護すれば…….

松本　また“神秘主義”か.

中山　その席で，沢田先生はそんな調子だったし，松本先生はもう酔い潰れてソファーベッドに横になっちゃって「わしは人間失格だ，わしは人間失格だッ」って叫んでらしたんですけど，ご記憶ございますか.

松本　ありますね．あの時はだいぶ芝居がかってたんだ．自分では，芝居的な気持になってた．あの時分，太宰かぶれを意識してね．そしてその時に三雲君が，酔っぱらって気がついた時に，下水か何かに片足突っ込んで目が覚めたということが頭の中にこびりついててね．あの時分の白いお酒，ドブロク．ドブロクに少し中毒したような，そういうものを頭に浮かべて，芝居的な気持になってたんだ.

大江　三田哲学会について，たとえば最初に，これだけは忘れられないというようなものは特にないですか．先ほどの，第一ホテルで頭を下げたと，だいたいそのへんですか.

沢田　まぁ，自分の手痛い失敗ということで憶えてるのはね.

松本　日にち間違えたやつね．沢田さんと一緒に頭下げたもんね．あの時は沢田さんの失敗なんだけども，僕は沢田さんと一緒に頭下げたのよく憶えてる.

沢田　そういう人間的な記憶はあるけれども，学会全体として特に記憶に残るということはないし，それはおそらくどこでも，他の哲学会だってやはり記憶に残るというのは個人と個人の出会いとかそういうことで，学会との間に深い関係というのはあまりないと思うけども．でも，やはりそういうことを通じて個人との出会いということが，僕は一番大切なことではないだろうかと思うので，その意味では，日吉で松本さんに出会ったこととかそういうことが，やはり三田哲学会が機縁だったでしょうね.

松本　とにかく僕は，この方（沢田）と会って，「僕はあなたを先生と呼ばない，松本さんと呼ぶ」と宣告されたんだから，こういう人初めてだよね.

中山　だからしょっちゅう，お二人の間は緊張関係だったわけですか.

松本　いや，緊張関係じゃない．そういわれて，僕はいい気持だった．

中山　うれしかった？

松本　ええ，最初にそんなこと宣言する奴って，滅多にいないもんな．

沢田　さっきも言ったように，横綱に胸を借りたという，それは本当に一生忘れないことだと思うんですよ．

松本　だってこの人（沢田），僕が教壇の上に立って，その僕から教わったことないという意味で，先生じゃないって言うのよ．ちょっとしゃくにさわったけども，お前さん助手だから教わったことないと，そういうつもりで言うの．

大江　その頃はまだ教えておられなかったんですか，教えさせてもらえなかったんですか．

松本　そうそう，助手なんだもの．（笑）

大江　でも，この頃はわれわれ助手の時から教えさせられたけれども，そういうことはなかったんですか．

松本　うん，なかった．全然なかったからね．

大江　助手はあくまでも助手．

松本　助手．

＊船田先生の想い出＊

中山　それで結局，個人との出会いというのがやはり一番大事だというお話が出たんですけど，私はいつも，この方どういう先生なのかなと思っているのは，松本先生の『「存在の論理学」研究』が“船田三郎先生に捧げる”というふうに扉に書いておられますね．船田先生には，私が学部の学生の時に1学期だけ「歴史哲学」の講義を伺ったんですが，その後ご病気でお辞めになってしまわれたんですけれども，この先生はどういう方だったんでしょうか．

松本　なるほど．こいつはまた面白くなってきた．先生は講義がとても

緻密で，一分のスキもないようなご講義だった．それに比べて他の先生の講義は，なにか僕たちにとってはスキがあるように感じたんだ．

それで僕は，その講義を聞いて，講義が終わった時に教壇のところに上がっていって，先生に「これからご指導をお願いいたします」と思わず言っちゃったわけ．沢田さんは知らんけど，僕はそう言っちゃった．というのは，他の先生の講義を聞いてもそういう気にはなれなかったわけ．他の先生のはあんまり講義の迫力がなかった．そういう感じでね．つまり僕は少なくとも船田先生の講義は，非常に古くさい形式のものだったけれども，僕にとってはそういう感じだったんだ．そんなことだったわけね．

それが結果的には他の先生，ことに橋本先生やなんかに対して，僕がずいぶん失礼な態度をとった原因にもなるんですよ．

中山　なるほど．無給が長く続いた原因にもなったわけですね．

松本　そういうこと．だからしっぺ返しくっちゃったわけよ．

沢田　僕も卒業論文は船田先生でした．船田先生，本郷の，東大の前のところに住んでおられて，ときどき，学生の僕の友達なんかとお寄りしてね．そうするとすぐにお酒を出してきて，酔っぱらうと「貴様!」が出るんだ．「貴様!」と言い出すと，もうすっかりご機嫌で，それでよく議論したんだけども，今松本さん言われたように，船田先生というのは，これは僕は悪い意味で言ってるんじゃないけれども，自分自身の哲学思想というものは持っておられなかったんではないか．というのは，船田先生が亡くなった時に僕は先生の書いたものを全部整理したんですが，何にもないんですよ，自分自身書かれたものが．誰かの紹介とか，それから翻訳も一つくらいあったかな．

その代わりドイツ語はぴしっと読まれて，そして他の先生と違ってちゃんとそれの解釈をしていただいたということでは，やはり哲学だけに限れば，忘れられない存在ではないかと思う．やっぱり松本さんも僕も非常に感銘を受けて，要するに，哲学の外国のものを読む時に，どういう態度で

読まなければならないのかということは，非常に徹底的に叩き込まれた．

大江　松本先生なんか，たとえば講義として聞かれたのは歴史哲学ですか．

松本　いや，哲学概論聞いたな．

大江　それでは，いろいろなことなさってたわけ？

沢田　哲学演習もね．

大江　当時教授の方々ってどなたがいらしたんですか．

松本　橋本先生，船田先生，川合先生，守屋先生．

沢田　それは美学のほう．

大江　だいたい3人の方が主になって……．

沢田　哲学プロパーとしては，橋本さんと，それから船田先生．

松本　橋本先生は演習が主だったかな．

沢田　それからあと川合先生．

大江　われわれは船田先生にはもっぱら歴史哲学を習ったんですけれども，歴史哲学をご専門になされるようになったのはいつごろからなんですか．

沢田　もともと船田先生は歴史哲学に関心を持ってらしたですね．だから歴史哲学という授業はその頃日本で慶應にだけあったんじゃないかな．だけど，その他にやはりいろいろな関心を持っていた．

中山　ちょうどここに昭和9年と昭和16年の講義題目があるんですけど，船田先生に関しては昭和9年のほうは哲学概論と西洋哲学の演習，そして西洋哲学史の古代・中世，歴史哲学というふうに持ってらっしゃいますね．それから昭和16年のほうでは哲学概論とやはり哲学史の古代・中世，そして歴史哲学というふうに持ってらっしゃいます．

それから昭和16年には松本先生が論理学を，もうすでに講義としてお持ちになられていらっしゃるんですね．ですから，助手時代講義しなかったというのは嘘で，(笑)　昭和16年にはもう（講義）してらっしゃるわ

けですよ.

松本　そうかな…….

大江　そういうのは忘れちゃうんですよ. (笑)

松本　被害意識ばかり持ってて.

中山　だから (沢田) 先生がお出になるまではそういう講義は持ってらっしゃらなかったわけですよね.

沢田　そうです.

松本　助手でそんな講義させたのかな.

中山　ですから, もう昭和 16 年というのは助手ではないんじゃないですか. まぁ, これは後で人事へ行って調べればわかりますが. (笑)

松本　嘘ついてたかな. (笑)

＊三田哲学の存在意義＊

中山　いろいろなお話いただいてきたんですけれども, 偶然集まりました中でお三人ともそれぞれ三田哲学会の会長を務めてらっしゃるわけです. その会長時代, 三田哲学会というものをどういうふうに持っていこうとか, 方針といいますか, そういうふうなお考えもあったかと思うんですが, そういうものを何かちょっとでもお漏らしいただければ有り難いんですが.

松本　そんな経験はないよ, 僕は.

中山　だけど松本先生の時代に, とにかくここは若い人の登龍門であるという一つの原則をきちっとお出しになって, そしてその前の会長でいらっしゃった橋本先生の時には古稀のお祝いの記念号を出したわけですが, 先生はそれを絶対に拒否なさったんですね. 登龍門であるんだから, そんな会長をしたからってそれの古稀の祝いの本なんか出して, そっちへお金を使っちゃいかんと.

松本　そんな殊勝なこと言ったの.

中山　非常に殊勝におっしゃったわけですよ.

松本　今の僕だったら「出せ」って言うな．(笑)

中山　それで，実は裏話ですが，われわれ非常に困りましてね．つまり先生を除くこの三人は非常に困ったわけですよ．

松本　あ，そう．惜しいことしたなあ．今だったら「出せよ」なんて言うんだけど．

中山　それで本屋を探したわけですけれども，そこらに何かお考えがあったんだろうと思うんですが．

松本　その時分はきっと潔かったんだが，今じゃだらしがなくて「何故出さなかったんだ」と……．(笑)

中山　松本先生の後，先生がお継ぎになったんですね．

沢田　ええ．

中山　先生の時代はいかがでした．

沢田　だからその方針で，できるだけ若い人の，しかもそれまで一緒だったのが，社会・心理・教育と分かれちゃった後だから，よけいそちらのほうには別の機関誌がある，それを何とかこっちへ，ということで一生懸命向こうの人出してもらって．だから社会学やなんかの人も幹事に入ってもらってね．

中山　その結果，つまり今度は逆に専任者があの雑誌には書かなくてもいいんだという風潮が一部出てきちゃって，それで大江さん，会長当時ずいぶんお困りになったんじゃないかと思うんですけど，その辺どうでしょう．

大江　私は，一応会長というのは，三雲君が亡くなってからだから1年ちょっとぐらいしかやっていないんですけれども，ただ一つ昔とも全く違ってるのは，やはり大学院生というものがかなりの数いて，しかも或る程度業績がなければ就職にも困るという状況があるから，それはやはり三田哲学会の雑誌でもって或る程度書かせるということは絶対必要だということはあるんです．

けれども，もう少し専任のスタッフのほうも積極的に書いて，両々相ま

ってということになればいいんだけれども，どちらかというと専任者のほうはあまり書かん．

それからもう一つは，いわゆる例会というのもあまり持たなくなってきている．昔だったら留学して帰ってきたら，一応報告というか土産話でもないけれども何かする．そういう伝統も今は切れちゃっている．やはり他の人に迷惑かけて留守にしてたんだから，やっぱり帰ってきたら一応向こうで何をしていたかということを話すぐらいの習慣は，もう一度確立しなければいけないと思ってるんだけど，まだなかなかそういうところまではいっていないんです．しかし，できるだけそうしてほしいということを要望している段階なんです．

沢田　山本万二郎さんが留学から帰られた時には報告会やりましたね．

大江　そうでしたね．だいたいそのへんぐらいから――なんかこの頃若い人わりかた外へ出てますけれども，だからといって彼の話聞いたことあるかなと思って考えると，本当に誰も聞いてないというふうなこともあるんですね．やっぱりそれは，もう少しきちんとやらないといけないんじゃないかなという気がするんですよね．

沢田　考えてみると山本万二郎さんの話，非常に役に立ってるんですよ，その時には気がつかなかったけども．

というのは，その時，山本万二郎さんがハイデガーに会って，これからの実存哲学どういうふうになっていきますかと言った時に，ハイデガーが，もう実存哲学は私でおしまいで，これから先はもっと科学的な哲学が盛んになるだろう，と言ったという報告があったんですよ．そしたらその時に橋本さんがおられてね，「それはね，君，“ニヒト”聞き落したんじゃないのかい」なんて言われて．

ところが後でハイデガーの書いたものを見ると，ちゃんとその通り書いてあるんですよ．だからそれを山本さんはちゃんと聞いて，そして言われたんだろうけども，当時はハイデガーがそんなことを言うとは思いもかけ

ないという雰囲気だったけど，後になって，山本さんはちゃんと聞いておられたんだなというのがよくわかった．

それで今われわれは過去のことをおぼろげながら話したけども，現在一体どういうふうになってるんでしょうね．それをむしろ逆に大江さんに伺いたいんだけれども．

大江　三田哲学会自体が，ですか．今，間瀬君が幹事長をやってくれてるんだけども，いろいろな意味での例会というのは，ここのところわりかた盛んにオーガナイズして，たとえば外国の人が来るとか，それから院生レベルの発表というものは1年に2回なり3回持つとか，シンポジウムも企画をするとかということで，活性化しようという努力は続けてるし，だんだんそういうふうに動き始めてきたと思うんです．

ただ三田哲学会自体がどういう方向に進むかというふうなことは，それは今の哲学会それ自体も大変難しい状態なのではっきり言えないんだけども，ただ若い人たちの相互刺激，われわれスタッフも含めてですけれども，それをもう少し活用できるというか，そういう意味での生命を与えたいという感じはするんですけどね．

中山　その一つの現われとして，MIPS (Mita Philosophy Society) というふうな…….

大江　同窓会というか，あれは三田哲としては一応切り離してはいるけれども．

中山　哲学・倫理で始めてみたわけですね．今のところ，割合うまくいっているんですよ．ですから各専攻でそういうふうな形でやっていったらいいんじゃないか，そんな動きは一つあるわけですけどね．

大江　やっぱり塾出身の研究者，ほうぼうでそれで御飯食べてる人たちもだんだん増えてきてはいますね．

中山　たとえば，細谷なんか鹿児島から来て，それでここで発表したということを非常にうれしく感謝しているわけですけどね．

松本　いつ発表したんだっけ.

中山　あれは一昨年くらいですね. それから昨年, カントの研究発表をして下さったのは誰でしたっけ……?

大江　田山君. 彼はもともと倫理出身なんだけども, ロンドン大学でカントで学位取って, 今京都の仏教大学にいってますがね.

中山　そういう方が来て話して下さるということも, たとえば現在大学院にいるカントなんかやってる連中にとっても非常に刺激になりますし, これは非常にいい試みだったなと思ってるんですけど.

沢田　僕の時に, 学生たちに対しても聞かせるといって公開講演みたいなものをやったことが2回ぐらいあったような気がするけど, 今もやってるんですか.

大江　それは心がけてますし, それから外国から人がみえた時なんかも当然, 形のうえではそういう形になってます. この頃は外人で結構, 学術振興会のお金で来て, 慶應でも一応しゃべってもらうとかそういうふうなケースもありますし, それからうちのスタッフが向こうでコンタクトを持った人たちが来るということもあるし. この頃の学生, 外国語うまいもん. 結構しゃべるやつもいれば聞く力もあるし.

＊三田哲学の今後＊

中山　さきほど, 沢田先生がおっしゃった中で, 社・心・教というのが哲学科から分かれて別個になって, さらに人間科学専攻ができて, 現在それらはどういうことになってるんですか. みんな三田哲学会に入ってるんでしょうか.

大江　みんな入ってるんです. 別にそれ切れちゃったわけではなくて, ただ, いわゆる社・心・教と称してる, 社会学研究科に属しているグループについては大学院生のための紀要というか, 別個の研究雑誌は持ってますからちょっと違うということはあると思うんですけど.

沢田　それと学生会費を取る時に，向こうのほうからも取ってるわけでしょう．

大江　だから潤ってるんですよ．

沢田　それがもし独立したら…….

大江　そう．それで一時ぎくしゃくしたこともあったけれども，皮肉というか何というか，昔は社会学がとてもお金がたくさん入るところだったけど，今度，人間科学というとまた人数が増えたから，社会学の他にもう一つ，大口の収入源ができたから．それで三田哲学会は今，俄然財政的に豊かになったんですよ．それはもう，ひと頃に比べたら…….

だからそれだけに，やっぱり活動もして学生諸君にも還元しなくてはならないし…….そこで今度，別冊として『文献案内』というのを作りました．こんな形で少しでも学生諸君のためになるようなことも心がけてます．

沢田　それはいいものを作ったね，学生にとっては．

大江　ひと頃ちょっと危なかったんですよね．松本先生の頃だったと思うんですが，赤字でちょっとピンチになった．それであの時は，確か雑誌の発行回数も減らして，ジーッと耐えていたと思うんですけれども．

沢田　僕はその後引き受けたんだ．その時に，それをどうするかでだいぶ悩みましたが．

大江　今は，とにかくそんなに困らないんですよ．

沢田　しかしこれから先，今のそういう財源がいつまでもうまくいくかどうかということも…….場合によっては向こうが独立するなんて言い出したら…….

大江　ひと頃は，むしろ非常に強かったんですよ．だけどこの頃，あんまり言わないね．それはどういうことだかよくわからないけれども，とにかく今のところは落ち着いていますよ．たとえば社会学とか，まあ今でいう人間関係学科に属する人々もかなり書いてるし…….それに大学院生が自分たちで編集するような発表機関も持ったほうがいいだろうということで，

三田哲学会では，それに経済的なバックアップしようと方針を決めています．やはり彼らが自分で編集して，できるだけ習作でもいいからそういうところに書いて，それでもう少しちゃんとしたものを，たとえば『哲学』に載せるとか，お金のある時に多少刺激を与えたほうがいいだろうと思って．

中山　ちょうど京都大学が「中世哲学研究」というのを全く同窓会的に出してるわけですが，それはほとんど大学院の学生なんですね．それに心ある先生方に会員として入っていただいて会費を頂戴する，というふうにやっているようですけど，そういうものがほうぼうの科にできてくるといいわけですね．

大江　この頃ワープロの発達で，本格的な印刷にしなくても，ちょっと格好付けたものは出せるわけですよ．それだとそんなにお金いらなくても出せるので，彼らとしても，もうすでに二部ぐらい出している．それに多少援助してやって，もう少し形をつけてやろうと考えているわけです．

中山　それに対しては，創刊号の発行という予定で，三田哲学会は 100 万の予算を計上していると聞いています．院生のほうも，この夏休みまでに出す予定で計画が進んでいると聞いていますよ．

沢田　今までの三田哲学会になかったことですね．

中山　そうですね．

大江　やはり何といっても，院生という若手研究者のグループがありますから，それは昔とちょっと違うと思うんですけれども．

中山　しかもそういう連中は，他の大学の院生とも連絡を持ってるようで，情報が非常に速く伝わってますね．

*　　*　　*　　*

中山　それでは，思い出から始まって一応展望というふうなことで現況までお話いただいて参りましたが，そろそろ時間でございますから，このへんで締めさせていただいてよろしゅうございましょうか．

どうも有り難うございました．　　（了）